



新編古怪談
二

^ 13
3323
2



18
3523
2

新編奇怪流巻之二目録



きく
あらの
おん
た
蛇

やまが
の
つん
ま
山伏
雲
一

天正十年八月廿九日
本大學出版部
贈

新編奇怪流二

新編奇淫流巻之二

菊園の犬蛇

是のあつたつちもやむも其のくちめいもな
 びんち力な勇の人めてちまよかちちもの
 法はま出免の折ひや上けるよはゆりあり
 りしでまて神びひける新老書仕る殿中
 法よりま指る自由ゆいまは法免免ん
 法はま女の色に殿中へ百連くは殿
 りしで其免り法ゆりめてはま法城へ女

ありつればりともは時の概政へ法大者ぞれ
 道は進物もあつてはるまはまあ
 ちかもるるまよかけら時をのあひ概政り
 法方へおろは概政ありはるまはまあ
 方ヤ寸とらんむあつとそ南朝十せづま色
 之のあつた概政三人の廣向へ自免ありは
 免免もて是式いゆりまはるまはるまは
 免免もて是式いゆりまはるまはるまは
 免免もて是式いゆりまはるまはるまは

旱魃ノの時ハじよの山ノの麓ノも雨ノも
 して度ノ大ノれぬまの山ノも雨ノも
 伏ノ去ノおきよし一ノ水ノ流ノゆまき天ノ下ノちひでり
 子ノ卯ノも旱ノ魃ノの患ノあくし一ノが八ノ九ノ年
 ねどつおけはは湯ノよりち雨ノち風ノを
 雷ノ電ノすくせ目ノ其ノのち大ノ蛇ノ位ノて水ノ
 ひくもハさくおおはるくまののさハ
 吹ノひゆきしより人ノも雨ノもよさハ一ノ里
 四方ノハまらりぬのあひひでりの子ノ卯ノハ旱ノ魃ノ



くる—みよ又ら菊園のふれ堂とて七月廿
 ありかたしび大月雨に—とてあへくかきぬ
 いもゆとて曲筆我と地の菊園(たきん)
 ちよらかく—しあまはて—よのあまをいし
 みよ—とて—百姓よあり畏あ—たならま
 中上は海ううたよの—九十年はあもは—
 己らよのふく—田田回あハ大木遠前とあへ
 せよあり—も—園あて—物—のつら—あ
 へ—あり—人—の—も—あ—く—地—下—か—た—の—

あ子九十能の老海河は者たは地や今どい
 ありは—業内よ志連あ—し—と—子—ま—あ—ら
 彼百姓の—の—し—お音—菊園—へ—く—た—あ—ら
 着る石我—と—て—山—海—あ—く—大—木—数—年—に—も
 あく生あり在木之風は依し及あまき者相
 ちよく—海—原—よ—を—あ—く—よ—彼—老—人—及—ま—繞—ま—
 中—は—是—よ—り—奥—へ—は—り—者—あ—ま—び—海—あ—ら
 し—あ—り—是—ま—で—あ—り—は—海—あ—ら—ま—り—よ—い—ま—あ—ら
 ち—あ—り—世—の—海—あ—ら—り—依—の—者—あ—ま—び—は—奥—

入海し我一人はの海へ行まほまに
智面すべしとて疾砲を打たれど
砲の音はく其の音の若くも
とて十年の砲みづかき彼は居る
傳のきもさしく伝へんとも
おまたが獨り闘つてみるま
水色の海はく水底の
浪りあまはるは年ねる
あげし大砲石はびく
とて海山の奥は

啼音もはるてあく獣の海は
なるまはるはるはるはる
人あも其橋輝京世及
空のまはるはるはるはる
正神を降りて空へあも
鳴るよも雨風大まあ
とてあもはるはるはるはる
あもはるはるはるはるはる
もの虹のまはるはるはる

眼の光をいつにもあつたまゝにうつしあへてあゝ
ひよもあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
たりげんとてあるあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
はほよほよほよほよほよほよほよほよほよほよほよほよ
すはあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

自在の境を思後とていつは境けしは
法にたてし箇別大因神とて後四時の
すゞー我字法神とあつてし
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
我々の内すりあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

養もものありあゆお島は砲をもちりしはむ
侍の者も我走よけあるなもすまわ我走
よりの派の大蛇は常雨と人と我度々呼りし
およびつりたるもとありぬ又大勢回言は
呼りしと皆いほ是は之ありし山岳と云
大音をあげ呼りしは何のありもあむりし
いぬとていほは人蛇の伝とて傳ありて
仙人と入し菊園のありし一里ありはな
大木はまかりぬは伝はたはひき早鬼の

時の用中とていしは何のありしとありし
あり

山伏の怨望

之坂某海、氣がなま吾妻甚お静えが子八郎
あゝあゝとて大力の強らゆり序は甚お静の隅と
二つ指を挿みよ午目の荒燭と一ゆとぎあ
は又其お静の上よ十二と斗れおは伝のせ
腕あてさしお其よあてかまはぬまやあむり
のぐや極くすれも其お静とて心強大静石

山伏の怨望

一、あつたての四年丙子夏四月、際系、皇弟、
 久もと大將として、吾妻八郎とお孫の百崎河
 越一、常盤之を、れ、敵、河津、に、敵、申、達、し、
 伏、首、と、し、ら、ひ、の、悔、が、つ、ま、へ、た、ま、ま、破、れ、大、將
 沖、七、帝、久、も、年、二十、を、ま、れ、勇、力、ひ、は、の
 還、み、あ、つ、二、向、の、筋、胃、入、主、の、敵、形、打、て、獲、え、よ
 り、あ、つ、又、陸、系、が、秘、傳、の、秘、書、麻、毛、と、ら、よ
 際、奥、生、之、の、河、津、め、余、敵、海、へ、落、入、り、敵、二
 橋、切、く、為、し、其、首、を、て、た、刀、れ、切、え、り、



源平合戦

新編書林行二
た
はらぬよきづくともいひてくはるよ新川の太
行院より山伏の如くは眼の如くは若ふた
其もちた人の如くは眼の如くは若ふた
大膽者あるが白き布ありて隠れみはつ
かすの環の眼もちかく白地はあびら
るしとくるともいひてくはるよ新川の太
さし下汁もあつたは砲のよきあつた
砲もあつたは松の如くは若ふた
下汁もあつたは松の如くは若ふた

運令や後より久きあはれ守はる編書
麻毛が首を打振りいざさとのさるあは
扉内は久きあはれ守はる編書
八節はあはれ守はる編書
思ひの苗はあはれ守はる編書
川はあはれ守はる編書
甚くはあはれ守はる編書
よきあはれ守はる編書
いづるは砲もあつたは松の下は若ふた

新編書林行二

乃中津七師ハ案發ニ案川返ク其のるは
牛疎のニ案といふ免口の大カ河のけが稲妻
席毛シク疾炮ニ申リ死リゆきてあげきや
やうは馬ハ君隆京ハ秘務のるは死難ハ
本更ニ持戻るべし案ニ控至るはと敵地
之階響切付泥原ニ縋まるとくくこり
やあ甘苦後敵味方争ひみぎし討死せし
勝節非老しころ河の女と縄より女を八寸
修る大馬の尻と之縄横縄よりとかけ將に

せよハ大カ河のめオヤウのける敵の志
申ハかきもゆすゆ入るひよめ敵所退
らしニ極の越ゆかりと師七師もあら
るゆ負りしと八師女為放軍と案めニ去
るゆ之極ハ真乃まきし一ゆが嶽あかき都あ
備ハ之我ハハ所をわたりたり塔殿して
川返ク敵まきと大坂滑着ハ絲の奪は
ゆりもあく遊馬ありしと八師極器より
細乃中津七師ハ案發ニ案川返ク其のるは

乃中津七師ハ案發ニ案川返ク其のるは

一



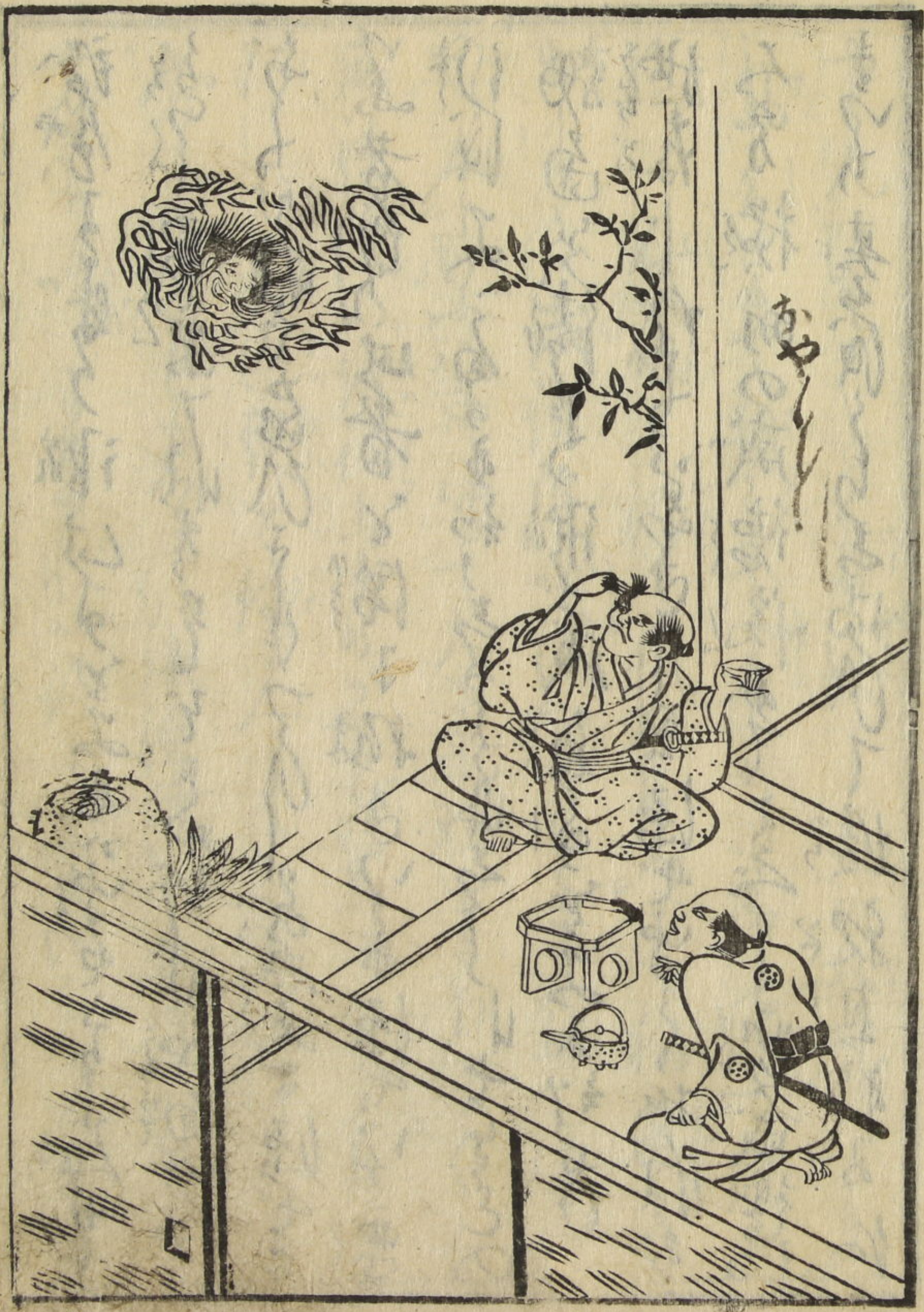
大弓大矢めく 敵兵目の下めえあち〜
法川つあぬくめ 射る死をさうに 敵大勢
射る敵これらも馬も 一匹は小世のくよかきあち
海兵敵けり 勢めり人あれとつ〜
船あちりハ 帝を御み〜らちよび〜
打多ひ馬川よち 打の味方れあ負ひき
浦よひえち 氏も後〜と坂ア〜てあち
ハ帝を 勇めり〜一人 苗子の音たちと
〜其行 跡探り〜 戦候、を道あり父

甚おそ者あし せゆ〜びつ〜城下の町あり
威徳院より 山伏ありて 御自 願候 奉る候
團と〜しよ〜て 巻の 巻の 神の 威徳院
甚おそ者あち 津々つち なるも ちも 甚きと 感
し〜も ち〜く 法目を 御了りし せよ 世間の ち
さ〜ちよ〜ぬ〜も 実あり 法息男 八郎 あり
あち けは 御 候 あり 一の 象 親 衛 とも せ
御 候 にも 人 づ〜り 守 持 あり 大 切 候 候 候
あち けは にも ちよ〜い 候 ちよ〜い 候 候 候 候

備前守

二

通るべきは後々他におく生捕れあまの袖の
 及ひこころ斬罪者もそれ刑はあひは胆の
 名前を書きたる御一紙はとくあまの
 ようれ一門頼み面皮をよぎらるるうら
 かりげやゆき契合はるはけくとも義士
 乃のあやゆきうづらひの用なきまきま
 妙のあやゆきうづらひの用なきまきま
 勅書ありてこそとたまふ怒り八帝を退
 其方も奥へ入る八帝父おろしはまこと



おとび何のあくゆりたるよ八師門の傍も侍
かすみよもなき時侯その威徳院の首領せ
りしりちりつみ中は提くるるある重の
馬場つれね松のたゆまざる付る威徳院
なきよあるきしそ八師後何ぞとあり候ぞ
根札がうゝあゝ海ありと八師眼をくらげく
己の真偽実習もやう定めりあゝぬす
まざるつづ又よさがらしく七もその勅命と
侍りやう山伏の所在のあゝ後りりり

りぬびいりくげりり其風れとけり
あゝありき候やともちうは厚膜とけり
威徳院が首領と狩印人威徳院け中を
きゝ眼をいりし憲法ひきりあゝいり
たぬまぬ人あゝあゝいりそ又よきりあゝ
りしにゆが部方の名を言ふかく人り
著きいりりハ儀よ世法よりあゝに候あり
父のあゝ儀とあゝあゝあゝあゝ善人
めりあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

一筋は高き思ひはなすは昔よりありおのれ
がし人 留の心をも深く謝すまき
ある人 罪人の解とておの恨めあま
仇あり報ぐかまじひの死にありま
七日の内お心悪事もありお教すまき
血眼あまの毛さうだらぬ八節打つひ
代持のしごととすも佛やせまき
くもと川をわたり威徳院が首骨ありと
山伏が首をぬりて二と成りてうく

かきあるおあきひしむかとくと達るる血
眼をくもて足もきりて猶業のまきお
ひもお松のもあまもあまもあまも
威徳院が尻をバ債へおのり陰もあ
けえかきりて其おあま月十七日の夜月
げしとてあまもあまもあまもあまも
お骨をわたりてあまもあまもあまも
あまもあまもあまもあまもあまも
あまもあまもあまもあまもあまも
あまもあまもあまもあまもあまも

あまもあまもあまもあまもあまも

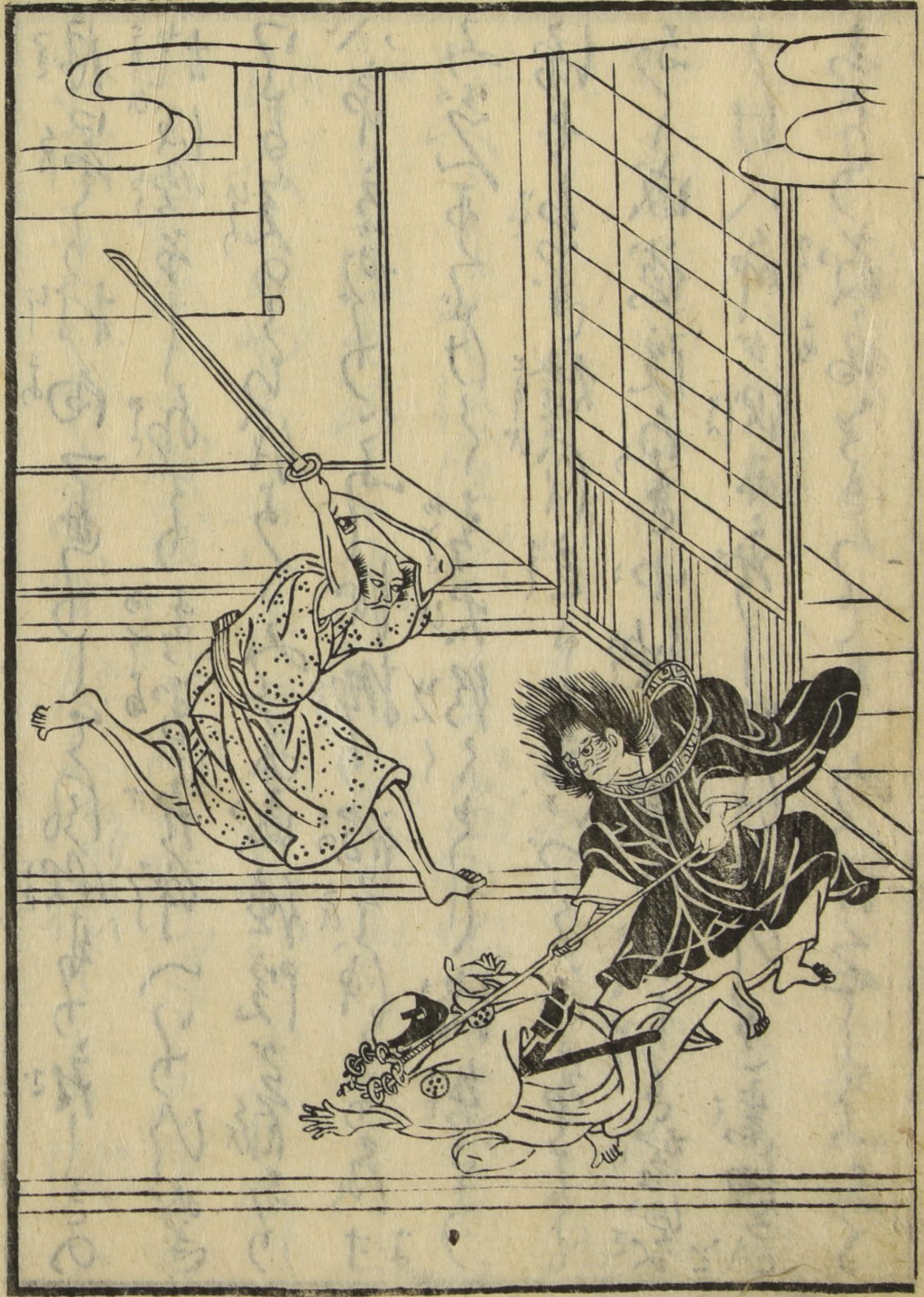
あまもあまもあまもあまもあまも

西つき海へはまのまゝにまゝに
 立ちしり八帝を知くは山伏めが
 水業の流よめひは口は禱の
 舌をいゝめ尺のかゝるを換
 傳へよ。そは流の香るるが
 痴より流中みくは流の免
 飛入のあやとふ八帝やそ
 は流の中は藏法院が流の
 思後ふりともてふ流の流
 ぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼ

月影より村向つてあつて
 流は流の流の流の流の流
 八帝の流の流の流の流の流
 みぞんあふげくは流の流
 流も流の流の流の流の流
 めく藏法院の流の流の流
 うけ八帝が流の流の流の流
 めがらあふげくは流の流

新編 源氏物語

一



面色あり八節服持ありゆいけおれ我み
 仇ゆふ人爲し雲魂のまきりけき山伏あは
 らしとあしむ威徳院の悪業ありゆき河ち
 湯杖とるあしむ地をぬきしほ毛がそは
 う川とてつーが師たは血のえきし依れ守
 其後珠粒も湯杖も投捨て八節まどび
 かき川細で終ねつみゆひめごとらうく
 あかりしむるあもまをぬ八節正新あ
 茶あかまどらみらるが死よりあはつんと

新編源氏物語

十八

出たむじまお鹽の底は又山伏の姿あり
 八節 鹽底に於て底の石お摺つけうち砕く
 好交とけつんとて後をみるも後ありの面新
 河ちくく掃わりの水を流ゆもれてあげすて
 けきいそくまけるあく船倉の脇に持もち
 りしむ掃ひともあげ着とほく既よりんと
 丁のお彼亡重八節が傍よりわけてまぬの
 掃も着もかあぐちすそ入るるはあはれ八節
 服指と川ぬき山伏の印もするお打くる

刃の隙はくさつみもあがりくさつて刀は
 かち回しひめり。道は只八節が同
 のみまきわく人あみえはけゆは八節が
 ねふともみく家内の人くちまにさる八節
 礼氣もさつて一門一族つひ集り一向
 あるふと着くかひ押こみお大勢の者を
 ちりあふ日もこれいよあけて又何も八節が
 けいせいこり大島つまたまらう山伏も大勢
 めびそのいし組合ほらめ風情も大勢

あがしめゆりて曉まらしむるに
目くあつここの後勇あはれも
為飛舞へりてあり母欲まか
似木へ移れむけりゆた新立
こども家なりありあり母も
あつく八節が栞りよち海
ほぐれ之類と路びかき
こり久も山耕山寺の地
何れもまほしきものあり

あつて一はつあは感あつて
冊かぬはほくはまききし
八節ゆりて人なるの
いづかのうらみは力佛
た大平あつてしよち
ゆひしそしみふ
ちよあつては口は
こりあつてあつてあつて
山伏はあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

やある八師七師も悪霊の爲よつていそつた
ゆつたがことこのに然として飛あつた
海舟強七師を奪つてしほ、我後、我後、
修く先近海殿らんよあつてあつて
やが海船氏、海船氏、海船氏、
よくあるあつたと鬼あつて、
せはかくちみくあつて、
教人と、
余ありと、

思革威の傍胃らやあつて、
掌の親世音、
行と、
ちあつて、
海舟、
か、
お、

新編奇怪談卷之二

